

〔頁要集三〕火箸之事附火箸莊之事

風爐の時は鏝火ばし、爐には桑柄を用申候事、利休以來也、爐にて火を多く取あつかひ申候ゆへ、桑柄を用申候、又長火ばしは、爐中底を取申時、半駄に底取長火ばしを組合出シ申候、

〔茶傳集九〕一圍爐裏火箸寸法

カチの所五寸、又四寸五分、柄の長サ四寸九分、又五寸三分、小口カ一分半置て、巾一分程針金ニ而卷なり、柄の形チは先細く少中ふくらにして、太キ所にて貳分に強キ程にして恰好見合、

一長火箸長サ一尺三寸、竹ノ皮ニ而柄を卷、間四寸一分、輪之所にて分半スカシ、染麻糸にて卷なり、

一風爐火箸寸法、長サ九寸三分、元ノ所茶の實の、如く丸くして、先キ壹寸程ツチメ付ル、鐵サビ色かるはりなり、

香合

〔千家茶事不白齋聞書〕香合之事

一梅鉢香合利休　こぼし梅香合利休とは申候得共、耽と不知、元は宗全方が出たるもの歟、つぶ菊少庵好　蛤菊の繪利休好、正親町の院様江上ル、今以用之、蛤金ふんニテ詩有り、紹鷗好、道安好、棗程にして、底三四分計り上テニ文字にまたる也、くはら香合隨流好、是は口口ニ付ル、くはらん木に而作り、墨塗にて中穴也、廻り江香を入ル、木魚、袴腰、地紙箱、樂燒如心好、雀香合、樂燒宗旦、やまほ仙叟好　一閑ニテ葛結文、覺々齋好、松之木おし鳥覺々齋好、ぶりく、玉原叟、如心も有り、紹鷗形は黒塗、梅鉢カ少シ平目、屏風箱、南京也、蓋に穴なく直成がよし、地紙ノ形は惡シ、模様は桔梗に蘆がよし、穴有ルハ虫入也、

〔茶道筌蹄三〕香合之部

香合は道具中にて至て輕き物ゆへ、利休百會にも香合の書付なし、夫故名物も少し、名物